（様式３－１）

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 （※１）	指定等の状況 （※２）	ストーリーの中の位置づけ（※３）	文化財の所在地 （※４）
①	茂林寺沼及び低地湿原	県天然記念物	館林市の南部にある周囲約 1 kmの沼とその周囲に広がる低地湿原。なかでも低地湿原は関東平野に残る数少ないもので、今も自然環境を良好に残す。希少種のコウホネやカキツバタなどの水生・湿原植物、トンボなど湿原の貴重な動物が生息し、古刹・茂林寺とともに「祈りの沼」の景観を醸し出している。	
②	茂林寺(分福茶釜)	未指定 (建造物)	応永33 年(1426)、茂林寺沼の畔に「祈りの場」として開山した寺院。江戸時代の茅葺屋根の本堂と山門があり、茅は茂林寺沼の葦が使用されてきた。貉(狸)の化身である守鶴がもたらしたという茶釜「分福茶釜」が伝わり、明治時代の巌谷小波の童話で全国に知られるようになった。山門前には狸像が並び、境内には童話を伝える巌谷小波の詩碑がある。	茂林寺
③	茂林寺のラカンマキ	県天然記念物 (植物)	茂林寺の本堂前にある樹齢約 600 年、樹高 14m の巨木。茂林寺の開山とともに、刃先が尖っているため魔除けとして植えられ、「祈りの場」となった歴史を伝える。	茂林寺
④	堀工町のどんど焼き	未指定 (年中行事)	江戸時代から続く行事で、茂林寺沼近くにある熊野神社の神事として行われていた。現在は地区の行事として、毎年 1 月 15 日に近い日曜日に、古いお札やだるまなどを焚いて、1 年間の無病息災を祈る。お焚き上げのヤグラは、茂林寺沼で刈った葦やナスガラなどを積み上げて作られる。	堀工町 ふれあい 広場
⑤	多々良沼	未指定 (名勝地)	館林市の西北部にある周囲約 7 kmの沼で、平安時代に行われた蹈鞴(たたら)製鉄から名付けられたという。中世の開拓者大谷休泊により多々良沼から用水が開削され、その水で潤された台地では米麦の二毛作が盛んとなり、肥沃な穀倉地帯を育んだ。この「実りの沼」からとれる鯉や鮒、鯰や鰻などは、里人の貴重なたんぱく源となった。	
⑥	多々良遺跡(カナクソ)	未指定 (遺跡)	多々良沼北岸にある遺跡で製鉄生産址と伝わる。現在の日向漁港の沼辺では、冬に水位が下がると、「カナクソ(金糞)」と呼ばれる製鉄の時に出された鉱滓を見つけることができる。	野鳥 観察棟

⑦	内陸古砂丘	未指定 (地質鉱物)	利根川が形成した自然堤防の砂層で、館林市南西部から多々良沼東岸まで続く。砂鉄を豊富に含み、多々良沼の伝説につながる製鉄時の砂鉄や薪などの資源供給地点となった。古砂丘斜面の松沼町遺跡からは古代の炭焼窯跡が発見された。	
⑧	大谷休泊の墓	県史跡 (遺跡)	中世の開拓者大谷休泊の墓。戦国時代の館林城主長尾顕長の招きに応じて領内に住み、渡良瀬川からの用水(上休泊堀)と多々良沼からの用水(下休泊堀)を引いて、周辺の田畑を潤した。多々良沼周辺の松林は大谷休泊の植林事業によるものである。	
⑨	上三林のささら	市無形民俗 (民俗芸能)	館林市南西部の上三林町に伝わる民俗芸能。多々良沼からの用水によって、二毛作が盛んとなった地域で、江戸時代中期から五穀豊穣と厄病神追払の祭事として行われてきた。町内の雷電神社の祭礼に合せて棒術と獅子舞を奉納しながら、地区内を巡行する。	上三林 雷電神社
⑩	封内経界図誌	県重文 (歴史資料)	安政２年(1855)に館林城主秋元志朝によって作成された領内 52 か村の彩色村絵図。村ごとに土地利用が色分けされ、江戸時代の沼の形が一目でわかる。河川や田畑、集落の範囲も描かれ、人々の暮らしと沼との関わりを知ることができる。	館林市第一資料館
⑪	沼の漁具と日向舟	未指定 (有形民俗)	館林市内の沼では、広く網を仕掛けて、舟に乗って集団で行う追い込み漁のほか、ハズ漁・ヤス漁などが行われ、さまざまな漁具が生まれた。沼によって使用する舟も形が違い、多々良沼の舟は、冬に凍結した氷から舟べりを保護するために一枚板を取り付けており、「日向舟」と呼ばれている。	館林市第一資料館
⑫	川魚料理 (鯰・鯉・鮒・鰻料理)	未指定 (無形民俗)	沼が点在する館林地域では、昔から鯰・鯉・鮒・鰻などの川魚料理が食されてきた。館林のもてなし文化の特徴として、川魚料理をふるまうことがある。中でも鯰が有名で、天ぷらや小麦粉をあえて揚げたタタキアゲは、この地域の代表する料理となっている。	
⑬	城沼	未指定 (名勝地)	館林市中央部にある、周囲約５㎞の東西に細長い沼。西岸に館林城が築かれ、江戸時代は人を寄せつけない「守りの沼」となっていた。南岸に名勝「躑躅ヶ岡」があり、北岸には「つつじ伝説」を伝える善長寺がある。春はつつじ、夏は花ハス遊覧を楽しむことができ、沼辺を周遊する「文学の小径」や「朝陽の小径」では、四季折々の景観を見ることができる。	

⑭	上毛館林城沼所産水草図	市重文 (絵画)	江戸時代末(1845 年)に描かれた巻物で、当時の城沼に生息していた水草などを描いた彩色図譜。オニバス、ジュンサイなど 12 種類の花や藻などが見られ、今は消滅した城沼の動植物を知ることができる。	館林市第一資料館
⑮	館林城跡 (三の丸土橋門・城沼墾田碑)	市史跡 (城跡)	館林城は城沼を要害とした城で、沼に突き出た台地の地形を巧みに利用して造られた。三の丸には江戸時代の土塁が残り、復元された土橋門と一体となって城跡の面影を伝える。また、明治維新後の旧藩主による城沼開拓に関わる記念碑がある。	
⑯	尾曳稲荷神社	未指定 (建造物)	城沼を望む台地上にあり、館林城築城の白狐縄張り伝説に由来する神社。城の鬼門(北東)となる稲荷郭に位置し、館林城の鎮守となった。境内には館林城改修で奉納された手水鉢や、城沼の景観を詠んだ館林出身の文豪田山花袋の歌碑がある。	
⑰	館林城絵馬	市重文 (絵画)	幕末の館林の浮世絵師北尾重光が、館林城と城沼を描いた極彩色の絵馬。明治 6 年(1873)に尾曳稲荷神社に奉納された。城沼が鮮やかな青色で塗られ、城の建物が沼に浮かぶように描かれ、「守りの沼」を鳥瞰することができる。	尾曳稲荷神社
⑱	躑躅ケ岡(躑躅) [つつじが岡公園]	国名勝	城沼南岸にあるつつじの名勝地。城沼に入水した女人「お辻」を偲んでつつじが植えられた伝説があり、歴代の館林城主の保護のもとで、回遊式の大名庭園となった。樹齢 800 年を超えるヤマツツジやキリシマツツジの古木群など約 1 万株のつつじが植えられ、城沼と一体となった景観は、「花山」と呼ばれ親しまれている。	つつじが岡公園
⑲	善導寺(榊原康政の墓)	県史跡(＊榊原康政の墓)	城沼北東岸にある、近世初代城主榊原康政の菩提寺。榊原康政は、沼に面した館林城をより堅固な城にするため、台地上に城下町を整備し、周囲の低湿地を開発して治水・利水事業を進め、守りを一層固めた。境内には康政をはじめとする榊原家の墓所があり、城と城沼の歴史を物語る。	
⑳	善長寺(祥室院殿の墓、お辻・松女の墓)	市史跡(＊祥室院殿の墓)	城沼北岸にある寺院で、沼の対岸に名勝「躑躅ヶ岡」がある。境内にはつつじを愛でたという榊原忠次の母「祥室院殿の墓」や、「つつじ伝説」を伝える「お辻・松女の供養墓がある。つつじの季節には、対岸のつつじが岡を結ぶ渡船が運航される。	
㉑	竜の井・青龍の井戸	未指定 (遺跡)	城下町に残る城沼に関わる井戸。竜の井は城下町にあった時の善導寺の境内にあり、女人の姿をした城沼に棲む龍神の妻が、寺の説話を聞いて井戸に姿を消した伝説が残る。竜の井と城沼の間にはもう一つの青	

			龍の井戸があり、徳川綱吉が館林城主の時に、この井戸から女官姿の清瀧権現が姿を現したといわれる。井戸の水は霊水として珍重されてきた。	
㉒	旧館林藩士住宅	市重文 (建造物)	館林城に仕えた藩士の武家屋敷。茅葺き屋根の建物で、館林藩士の暮らしの様子を伝える。屋根の茅は、沼茅(葦)が主に利用されてきた。明治維新後、士族授産による城沼の開発に多くの館林藩士たちがかかわった。	鷹匠町武家屋敷「武鷹館」
㉓	古蹟洗堰	未指定 (遺跡)	城沼の水を排水し、水位を調節するための堰。「洗堰」の由来は、中世の武将楠木正成が敗死し、その首を持って逃げてきた家臣たちがこの堰で首を洗ったという伝説による。堰の脇に石碑と楠木神社が建つ。現在、城沼の水はこの堰から鶴生田川・谷田川を経由して渡良瀬川に流れ込む。	
㉔	竹生島神社	未指定 (建造物)	江戸時代は城沼の入り江となっていた場所で、弁天が祀られて「浮島弁天」と呼ばれ、明治期に城下町の近江商人によって琵琶湖の竹生島神社を勧請した。境内に昭和初期に行われた城沼耕地整理記念碑があり、低湿地開拓の歴史を物語る。	
㉕	城沼の渡し舟	未指定 (無形民俗)	城沼の渡し舟は、明治時代の館林駅開業によって、駅からつつじが岡へ向かう最短ルートとして行楽客に利用された。昭和初期まで竹生島神社脇に「弁天の渡し」があったが、現在は「尾曳の渡し」と「善長寺の渡し」から運航され、７・８月には花ハスクルーズの遊覧船が運航される。	
㉖	小室翠雲画 「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」	未指定 (絵画)	館林出身の画家小室翠雲が、明治 28 年(1895)に描いた彩色画。「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」と題し、城沼とつつじが岡に集う人々が描かれ、明治時代の沼辺景観を見ることができる。	館林市第一資料館
㉗	旧秋元別邸	未指定 (建造物)	館林最後の城主秋元氏ゆかりの和風建築物で、明治末期に城沼を望む館林城の八幡郭に建てられた。主屋に広間があり、離れ座敷に茶室と洋館がある。庭園には沼で投網をする秋元氏の銅像があり、つつじや花菖蒲、モミジなどが植えられている。四季を通じて沼辺文化を彩る、館林の迎賓館としての役割を果たしている。	つつじが岡第二公園
㉘	正田醤油㈱旧店舗・主屋[正田記念館]	国登録有形 (建造物)	城下町で江戸時代から商家を営む正田家は、「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦や大豆を材料にして、明治６年(1873)に醤油醸造を開始した。正田記念館は嘉永６年(1853)建築の店舗・主屋で、正田家の歴史と醤油醸造に関する資料が展	正田記念館

			示されている。	
㉙	東武鉄道館林駅	未指定 (建造物)	明治40年(1907)に東武鉄道が川俣から足利まで開通した際に開業。駅舎は昭和 12年(1937)建築の木造 2 階建てモルタル瓦葺で、正面中央に時計をはめこんだ意匠が特徴。明治末期から城沼とつつじが岡を訪れる行楽客の玄関口となってきた。	
㉚	創業期日清製粉館林工場事務所［製粉ミュージアム本館］	未指定 (建造物)	明治43年(1910)に日清製粉株式会社館林工場の事務所として建てられた木造２階建ての洋風建造物。「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦を原料として、日本近代製粉業発展の歴史を伝える。創業110 周年を記念して製粉ミュージアム本館として公開された。	製粉ミュージアム
㉛	旧上毛モスリン事務所	県重文 (建造物)	明治42年(1909)に、城沼を望む館林城二の丸跡に建設された毛織物工場の事務所で、木造２階建ての洋風建造物。近代館林の産業発展を支え、城沼の守りを生かした工場群となっていた。花の季節には、従業員の慰安でつつじが岡へと繰り出した。	館林市第二資料館
㉜	分福酒造店舗 [毛塚記念館]	国登録有形 (建造物)	江戸時代から、城下町で酒造業を営んでいた木造２階建ての商家。建物の脇に「龍水の井戸」と呼ばれる井戸があり、かつて「龍水」という銘柄の清酒を醸造・販売していた。里沼の水源となる良質な地下水により、城下町に酒造業が発達した。	毛塚記念館
㉝	旧館林信用金庫[市役所市民センター分室]	未指定 (建造物)	大正末期に発足した館林信用金庫の近代建物。昭和９年(1934)建築で、鉄筋コンクリート造２階建て、タイル貼りの外壁や入口の装飾が特徴。大正から昭和初期にかけて町の経済発展を担い、沼辺のもてなし文化の原動力となった。	市役所市民センター分室
㉞	旧館林二業見番組合事務所	国登録有形 (建造物)	昭和13年(1938)建築の、芸妓置屋と料理店業を兼ねた「二業見番組合」の事務所。木造２階建ての重厚な瓦屋根が特徴で、2階に芸妓の稽古用の舞台と広間があり、昭和前期の館林の花街の中核となった。花の季節にはつつじが岡で館林の芸妓たちが行楽客を迎え入れ、沼辺のもてなし文化に華を添えた。	
㉟	田山花袋旧居	市史跡	江戸時代後期に建てられた茅葺き屋根の武家屋敷で、館林出身の文豪田山花袋が、明治初期の少年期に過ごした。花袋は城沼や城跡の風景をこよなく愛し、小説「ふるさと」にはこの家や城沼の景観が克明に描かれている。	館林市第二資料館

㊱	田山花袋関連資料 (田山花袋記念文学館)	未指定 (歴史資料)	城沼を間近に望む田山花袋記念文学館には、代表作『蒲団』『田舎教師』などの初版本のほか、原稿、書簡、日記、愛用品など、田山花袋に関する資料約１万点が所蔵されている。展示室には、小説「ふるさと」の自筆原稿と城沼の古写真があり、沼辺を愛した花袋文学の世界へといざなう。	田山花袋記念文学館
㊲	館林のうどん	未指定 (民俗)	江戸時代に「饂飩粉」(小麦粉)は館林藩の特産として将軍家への献上されていた。「里沼」と利根川・渡良瀬川がもたらす豊富な水資源が小麦栽培に適した肥沃な大地を生み、長い日照時間と赤城おろしと呼ばれるからっ風による乾燥した気候からうどんの産地となった。“麦都”館林のもてなし文化に欠かせない名産品である。	
㊳	麦落雁	未指定 (民俗)	大麦粉を利用して作られた麦落雁は、館林を代表する銘菓で、文政年間(1818～30)に完成して以来、館林城主献上の栄を賜ったという。城下町に根付いた茶道菓子から発展し、明治時代には「つつじが岡」の園内で館林名産として販売され、沼辺のもてなし文化を彩るものとなった。	

（※１）文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

（※２）指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文（工芸品）、県史跡、県有形、市無形等）。

（※３）各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

（※４）ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。